2002年

第１４回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第９集》

詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受託スル旨通告セシメタリ

抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共栄ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戦セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス　然ルニ交戦已ニ四歳ヲ閲シ朕カ陸海將兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戦局必スシモ好轉セス　世界ノ大勢亦我ニ利アラス　加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル　而モ尚交戦ヲ継續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ　斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ　是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス　帝國臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク　且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ　惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス　爾臣民ノ哀情モ朕善ク之ヲ知ル　然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ　若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム　宜シク擧國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ　爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

昭和二十年八月十四日

各国務大臣副署

ところ　緑生涯学習センター

月・日　平成１４年７月１３日

戦争体験を語り継ぐ会実行委員会

◎発刊のことば

二〇〇一年九月十一日のアメリカに於ける同時多発テロに対し、ブッシュ大統領は、「これは戦争だ」と称して、以後アフガンに対する大規模な戦闘を開始した。

一方イスラエルとパレスチナとの紛争も延々と続いている。戦争による被害者は、直接戦争に参加させられる若者だけでなく、老人、女性、子ども等である。

人類は昔から愚かな戦争を繰返し、常に弱者が被害に合って来た。日本の国でも「有事法案」が採り上げられ、キナくさい様相を呈している。

この世の中から戦争を無くし、人類が平和に暮せる日が来るまで、戦争に反対し続けたいと願っている。

目次

新型爆弾の命令受領 …… 橋詰　四郎 …… 一頁
若くして逝った妹達よ …… 太田　久江 …… 二頁
父親のような兵をなぐる若い将校 …… 竹内登美子 …… 三頁
死んだと思った兄が帰ってきた …… 奥村　清 …… 五頁
少年時代の思い出 …… 吉川　英治 …… 七頁
終戦哀史 …… 川口　篤孝 …… 十頁
戦争の残像 …… 高橋　幸雄 …… 十一頁
私の軍隊生活 …… 坂　鉦位知 …… 十三頁
チャコちゃん …… 石河　孝益 …… 十五頁
戦争体験 …… 能村とし子 …… 十七頁
私の戦中・戦後 …… 山田美智子 …… 十八頁
紙 …… 竹中恵美子 …… 二十頁
戦災の思い出 …… 山内　正雄 …… 二十一頁
白虹日を貫く …… 渡辺　正彦 …… 二十三頁
♥世界の子どもたちに愛を♥ 歌唱指導 …… 土井貴紅子 …… 二十四頁

新型爆弾の命令受領

橋詰　四郎

昭和二十年八月、日は定かでないが私は関東軍第六国境守備隊、歩兵十中隊長、佐久間右門中尉より、大隊本部へ命令受領に行くように命じられた。

命令書は茶封筒に入った通信紙一枚に、縦書き数行にタイプ印刷された簡単な文章であり、正確ではないが次のように文意を記憶している。

一、広島に新型爆弾が投下された。

一、兵を屋外に出す時は白の長袖を着せ、皮膚面を露出させるな。

一、兵の脱走、逃亡に特に注意すること。

命令書を渡し、当番室に控えていると再度中隊長から呼ばれ、命令書を読んだかと聞かれ、正直に「読みました」と答えた。中隊長は命令書を盗み読みしたことを叱らず、少し沈黙した後、誰にも口外するなと命じた。

私は、新型爆弾は皮膚に付着すると、皮膚が炎症するか腐る化学兵器かと思い、命令下達を待ったが命令書は下達されず九日。日ソ戦に突入した。

守備隊は全員玉砕してでも、ソ連軍の攻撃を三時間食止めるのが至上命令であり、この三時間で他の関東軍が戦闘態勢に入る作戦である。ソ連の強力な戦車軍団に爆雷で兵諸共戦車を爆破擱座し、三時間どころか、敗戦も知らず二十一日までソ連軍と対等の攻防を繰り返し、ソ連軍使が白旗を掲げ陣地に来て敗戦を告げた。負けていないので降伏を拒否し何人か離脱し、私も逃げる途中ソ連軍と戦闘をせず降伏した部隊へ「はぐれ兵」として拾ってもらった。

シベリアのクラスノヤルスクではロシア人から「アメリカ、広島・長崎アトム全滅」と教えられたが、「アトム＝原子」が理解できなかった。

二年後の昭和二十二年、地獄のシベリアから栄養失調だが、とにかく生きて帰ってきた。「白の長袖」で防げると思っていた新型爆弾の広島・長崎は想像を絶するものであり、被爆地から避難させるべきなのに、復興のために被爆地へ集中的に動員を繰り返し、放射能二次被爆者を多数発生させた。

この核に対する「無知」さは現在も原発を通し共有しており、私は「戦争」と「核」のない平和な世界づくりに余生をついやしている。

八月十五日から日本本土への空襲も、中国、太平洋各地の戦場も静かになった。日本が、世界が平和になってから満州では邦人の苦難が始まり、シベリアでは六十万から七十万人の日本人が、酷寒・飢餓・重労働・疫病で六万人以上が死んだ。厚生省はシベリアから帰ったのは四十七万三千人と発表している。戦争が終り平和になってからの犠牲者を広島、長崎に継ぐ悲劇と位置づけたい。

若くて逝った妹達よ

太田　久江

戦争中

夜。防空頭巾（ぼうくうずきん）を枕元に置いて。防空服で、モンペをはき、お布団に潜り込む。そんな毎日でした。いつ空襲があるかわからないから。電灯も外に光が洩れないように黒い布でつつみ、落ち着かない生活でした。私は五人姉妹の長女で、真中の三人を愛知県豊橋の空襲で亡くしました。母はその前の年に病死しました。

それは悲惨な出来事でした。忘れる事はできない。思い出したくない、思い出してばかりいると、私が前向きに生きていけない、昭和二十年六月二十日夜の出来事で、私の人生が狂ってしまいました。

戦争が激しくなってきたから、明日は田舎へ疎開（そかい）しょうと支度をしていた前夜でした。「アア今夜も空襲警報か、待避！待避！」と消防団の人の声。みんなあわてて、防空壕の中へ、父が「西の空が赤くなっている、どこかへ、焼夷弾（しょういだん）が落ちたな。ザアーザアーと。今夜は大変だ逃げよう」と。父は五女（明子）を背中におぶって、私達をかばうように家を後にしました。

逃げる途中、焼夷弾の直撃で、三女（百合子）は焼け死にました。四女（幸子）はどこかへはぐれてしまい、次女（近子）は逃げるとき、水をたくさんかぶって服もぬれて逃げたので、病気になり四カ月後に死にました。四女（幸子）は、どこかの防空壕の中にいるのを消防団の人が見つけて、市の防空病院に入院していました。体が三分の一ヤケドして、目もヤケドで見えなくなっていました。私は親類の焼け残った家の木になっていた枇杷（びわ）をもらってきて、幸子の口へ入れてやりました。「こんなおいしいものがあったの、はじめて食べたわ」と言って、十日ほど生きていて死にました。

薬がないのと、六月といえばもう暑くて、傷口にウジわいて、痛い、痛いと苦しんで死にました。

私は毎年六月二十日がくると、仏前に「幸ちゃん枇杷ですよ、食べてね」と供えます。今でもあのときのおいしそうに食べた姿が忘れられません。隣のベッドでは一家全滅の学校の先生の奥さんが全身ヤケドで、今日か明日かの命でした。医者も足りない、薬も不足していると、助かる怪我人も次から次へと死んでいきました。

十九才、十七才、十四才と、父は育ち盛りの我が娘を一度に三人も亡くし、身も心も打ちひしがれた心境だったと思います。その父も昭和三十八年、七十

二才で死にました。

ご馳走といえば、サツマイモぐらいでした。頭の中は刺身、天ぷら、牛肉のすき焼き。ああ食べたいと絵に画いたご馳走ばかりでした。着る物も食べる物も配給で、一家にどれだけと決められただけの生活がいつまで続くのかと、毎日が不安でした。国のために「ほしがりません勝つまでは」と、忍の一字でした。

終戦

疎開先の愛知県新城で終戦をむかえました。「耐えがたきを耐え、忍びがたきをしのんで」と、天皇陛下のお言葉がラジオから流れました。日本は負けたのだ、なんでもっと早く戦争が終わっておれば、こんな事にならずにすんだのにと、涙がとめどなく流れました。今までの苦労はなんであったのかと。

戦後

愛知県豊橋市の駅前で父は、掘立小屋を建て、うどん代用の海草麺（糸こんにゃくの様な物）に汁とネギを刻んで入れて売りました。食べる物が無い時代でしたから、よく売れました。また「ガチャマン」という言葉が流行し、機織り屋さんがガチャと機械で布を織ると「何万円」も儲かると、そんな時代でした。それから高度経済成長時代へと世の中は移っていきました。

平成十四年に思うこと

親友のすすめもあって、私は名古屋で一人暮しています。五女（明子）も家族と春日井に住んでおります。

日本の勝利を信じてお国のために死んだ若い特攻隊の人も、今は空の上から日本のこの良き時代を見守っていて下さるでしょう。銃後も大変でした。今でも当時のことを思い出すと胸が痛みます。

若くして死んだ妹達の分まで、私は命をながらえさせてもらって、幸せです。そしてこの飽食の時代を過ごさせてもらえることを、感謝せずにはおれません。

今の若い人達は、これが当たり前の世の中だと思うでしょうが、苦しい時代、尊い犠牲があればこそ、今が有るのです。

父親のような兵を殴る若い将校

竹内登美子

私が小学生の時太平洋戦争に突入した。昭和十六年十二月八日、私の二年生の時でした。この戦争は私達にとって勝利のことばかりが報道され、態勢が悪

くなるとその様子は余り聞かされなかった。直接戦争を体験したわけではないが、間接的に大いに体験しました。

戦争が激しくなるにつれ、若い人や、働き盛りの人々は軍隊に入り、つまり召集令状が届き、有無を言わさず、お国の為に命を捨ててと、家族や、友に見送られ出征していったのです。私も度々そんな光景に出逢いました。私達小学生は出征していった人々のあとを守るのだと心に誓い、通学しました。防空頭巾をかぶり手には教科書ではなく、竹槍を持ち、三十分程の道を歩きました。

校庭は食料不足のため畑にし、いもや豆を作っていました。そして校庭の囲りには、等身大のわら人形が建てられ、私達は毎日そのわら人形を竹槍で　えい！　と突く練習を真剣にしました。今にして思えば、相手は鉄砲で向かって来るのに、わら人形の心臓すら突けない私達に何が出来ると言うのでしょう。それでもその時は、何としても銃後は私達で守らねばの信念で頑張ったのです。

警戒警報が発令されると、急いで下校します。途中で空襲警報に切り変ると、何処の家でもいいから、その家の防空壕に入れてもらいなさい。との先生の指示で、余所の家の防空壕に逃げ込みお世話になりました。

この頃は食料も配給で、十分な食事も出来ず、食べ物は「さつまいもの粉」「豆かす」「いもづる」などでした。空腹のため食べるのですが、登校の途中に何度も嘔吐しながら、通いました。

夏休みには、軍馬の餌用として、草刈りをし乾草にして束ね「とみこさんは何キロ」と誉められるので一生懸命草集めをしました。又、稲穂が実る頃、袋の口に竹筒を差し込み「いなご」を捕りました。来る日も来る日も頑張って捕り、学校へ持っていきました。

又、友達の家族が出征し、人手の足りない家には田植え、稲刈りと手伝いにもいき、慣れない作業のため辛い思いもしましたが、みんなで助け合わなければと頑張りました。どんなに働いても、私達の食事はとても粗末でした。

米粒は数えるほど、そこにきざんだ大根を沢山入れてのお粥です。でも豆かすよりは少しはましだったと思います。戦地ではお国の為に戦っている兵隊さんのことを思って、感謝していただきなさいと常々躾られました。

私の家は名古屋市熱田区と、この大高町に保育園とお寺がありましたが、熱田の保育園は空襲で爆弾が落とされ、人が亡くなると、その死体を園庭に積み上げ、それからそれぞれの焼場に運ばれたと、留守番をしていた人に聞き、恐ろしいことと思いました。昭和十九年、父も応召の身となり、家は年老いた祖

父母と私と妹になりました。

まもなく保育園は軍需工場と兵舎となり、寺の方も本堂、座敷、離れ座敷、そして庫裡まで軍隊に接収されて、私達四人は六畳一間での生活となったのです。寺の釣鐘からお地蔵様の杖に至るまで、鉄や金属類は、弾丸を作るとかで供出しなければならなくなったのです。

時折見かける軍人さんの行為は、非人道的で、まるで日本人同志の戦場のように思われ落胆しました。若い将校が自分の父親のような上等兵を、スリッパや靴でなぐりました。少しでも、その反動で体が傾くと、また反対側からなぐられていました。すべて連帯責任で、さ細なことで痛めつけられている姿を見せつけられ、心が痛みました。こんなことしてて、日本は本当に戦争に勝てるのか、と思いました。夜、軍に電話が入ると軍人さんは、靴のまま私達の布団の上を無言で踏みつけ、電話をしていました。これらの様子を見ていると、戦地にいる兵隊さん達は、どんな思いで敵軍と戦っているんだろうかと思いを馳せました。

昭和二十年五月一日、熱田の保育園は名古屋の空襲で灰燼と化しました。ここは四年そこそこだったが、母と共に過ごしたところ。大切な母の思い出が残された唯一の場所だったので、焼失したことはとても辛く悲しかった。悲しさに堪え、相変わらずの通学を続けました。

昭和二十年八月十五日、先生から「天皇陛下より大切なお言葉があるから、姿勢を正しくして聞くように」と言われた。教室のスピーカーから流れてくる陛下のお言葉は、雑音も多かったし、私達にはほとんど聞きとれず、何が何だかわからなかった。あとでそれが終戦と聞かされたが、それでも誰も日本が戦争に負けたのだとは、口にしませんでした。

死んだと思った兄が帰って来た

奥村　清

年月の流れるものは早いもので、あれからおおよそ六十年になる。私の父母は田八反、畑少々と言った極く普通の農家で、当時「産めよ増やせよ」の国策に沿って、女の子一人を含め八人の子どもを育て、急な用事を伝えるときなぞ、我が子でさえ名前を間違えて呼ぶことが多かった。

私は昭和三年生まれで、すでに七十才を少し過ぎ、老いのためか脳の細胞もかなり減少し、当時の記憶については多少のズレがあるかも知れないが、我が

家にとっては悲しくて、そして嬉しい何とも言いようのない事件が起こった。

当時、日中戦争からアメリカを含めた太平洋戦争と発展し、戦勝一方だった戦局も徐々に悪化し、外地では玉砕・後退の道を。一方内地でも沖縄方面では、艦砲射撃、国内都心でも航空機による空襲と、益々戦況が悪化したのが昭和十九年頃からだったと思う。

だが、新聞報道ラジオ放送等では依然として、従来のパターンを変えることなく、前進あるのみと国民の心を煽り、一億国民の大部分がそのことを信じ頑張っていた。旧制中等学校で卒業を一年後にしていたが、勉学は殆どなく来る日も来る日も、軍事訓練と勤労奉仕にと励んでいた。そんな精神状態が最も普通であり、当然のことと今にして思えば、一種のマインドコントロールに掛かっていたように、思える一人の人間であった。

そんな時代その時あの事が起こり、六十年過ぎた今でも鮮明に脳裏に刻まれている事がある。たしか昭和十九年の秋だったと思う、兄の好美が現役入隊することとなった。それより半年程前、弟の茂が海軍少年航空兵として、呉軍港に勤務していたので、今後逢うことも出来ないかも知れない、言わば今生の別れとばかり面会に出かけることになった。父母も多少の戦況の悪化を感じながらも、軽い気持ちで納得し送り出すことにしたようでした。

現在のように新幹線が有るわけではないので、列車を乗り継ぎ、往復しても三日位いで帰って来るだろうと思っていたようでした。しかし四日目が五日目が過ぎても兄は帰って来ません。毎日のニュースでは関西より西方面での空襲が激しく、生死を問合せる場所もありません。人間は何時も同じように悪い方へ悪い方へ考えるもので、日が過ぎるにつれ夜も寝られず、お国の為ならばと人並みに考えていた父母も、現実に我が子の姿が見られないことで心配の極限と憔悴の何日かであっただろうと思います。

私はまだ大人に成りきっていない中子どもと言った頃だったので、それ程深刻ではなかったが、父母が悲しみに堪え農事を休むことも出来なく頑張っていた姿が、今になっても強く心の奥に思い出として残っており、時折一人そっと布団の中で涙することもあります。

そんな何日かが過ぎ八日目位いだったと思うが、殆ど西の空で空襲にあって死んだものと思っていた兄の姿が、農作業の田圃から五十メートル程離れた県道に現れたのです。国防色の服、戦闘帽、ゲートル、雑嚢姿正しく出掛けた時の兄の姿そのままだ。いち早く見付けた父は脱兎の如くの言葉通り一目散に、

途中二三度転んだようだったが、兄の体に飛び付き抱きしめました。声を揚げることもなく唯々泣くばかりでした。母も私も続いて駈け寄り長い間泣き喜び、四人輪になって頭をこすりつけていたように思います。日頃あまり親孝行など考えなかった私も、親の愛情がすごいものだなあとその時わかったように思われます。

そんな父は八十二才で、母は九十五才で鬼籍に入り、比較的両親共に長生きしてくれたものと思います。幸いにも兄はその後入隊はしたが間もなく終戦となり、兄、弟共に帰り私は軍隊の経験をしなくて終り、老いはしたものの皆んな元気で居り、両親もあの世で喜んでいることと思います。

今の日本は経済的不況、政局不信等多少の問題こそあれ、平和で先進国として世界に恥じない発展を遂げている。いまわしい戦争は二度と再び絶対にやってはいけないことと声を大きくして言いたいと同時に、先の戦争の為に国の為とは言いながら我が子を犠牲にされた多くの人達の苦労と、心情は如何ばかりだったかと改めて思いを寄せるものであります。

メディアの発達により世界中の出来事が瞬時に伝わる素晴らしい此の世の中です。しかし昨年九月のアメリカ同時多発テロ事件。アフガニスタン、イスラエルなどの戦争や内紛を含めた不幸な事態で、家族を失い帰る故郷もないという悲しい模様が、さまざまな形で伝わって来ます。真の平和、世界中の平和こそが人類を幸せにする全てであることを強く叫びながら、筆を止めます。

少年時代の思い出

吉川　英治

小学校四年生。太平洋戦争始まり、町内の出征兵士を見送ることが多くなる。千人針を頼みに歩くのも増えた。小学校四・五年生の時は慰問袋を作り、せっせと戦地に送る。慰問袋を送っているうちに岩田良平さん（碧南方面出身）から慰問袋のお礼状が届く。「慰問袋に入っていたドングリが乾燥していて、振ると音がする、夕日の落ちるのを見ながら兵隊達はドングリの音を聞きたいと集まり、故郷を想い、家族を想い、懐かしむ者、涙ぐむ者多く最高の物となり、隊ではドングリが宝物になっています。」岩田さんと一週間に一度の手紙の交信になる。

小学校の伊藤先生が一年間の手紙のやりとりをガリバン刷りにして配るまでになる。おまけが一つ、剣道の中村先生の時間に、岩田さんが満州の戦地から

隊の代表でお礼に家に来たから、帰るようにと電話が入る。軍隊式の中村先生は授業中に帰ることは許さぬと散々叱られる。そんなことから憧れの岩田さんとの出会いは五分位で惨めな別れになった。三才下の妹、喜代子は岩倉の寺へ学童疎開。

小学校六年生の一年間は毎朝四時に起きて新聞配達をした。朝日町の新聞店から縄張りの武平町界隈を配達。毎月の給料をそのまま、名古屋城の南にある陸軍憲兵隊本部へ寄付に持っていく、感謝状が十二枚になる。陸軍大臣東条英機の名前もありニコニコしていた。いま思えば多感な幼年が国のために徒労を味わった。それと同時に申し訳なかったことは、当時、薪でご飯を炊くため、母は僕より更に一時間早く起きて、卵かけご飯を食べさせ送り出してくれた苦労。（卵十個を籾殻入の箱詰めにして病気見舞いに持参するのが最高の時代）

僕の新聞配達で母は三時に起きて高価な卵まで食べさせてくれ巻き添えにしたことである。食料難時代、物資不足時代に難儀させた。逆に嬉しかったことは、武平町の弁護士さんの家に集金に行くと、三カ月に一度バナナを一本お駄賃に戴いた。（バナナは病気にでもならないと食べれない高級品）今一つ嬉しかったことは、新聞屋のご主人が「毎月の給料を、そのまま軍に寄付していたとは知らなかった。すまぬ」と言って、配達最後の日に自転車を戴いたこと。（自分の自転車を持っている子どもはなかった時代）

賑やかな町の中だから校庭はあまり広くない「男女七歳にして席を同じゅうするなかれ」の時代で、男子クラス、女子クラスと別れていた、それでも好きな女の子がいた。好きな女の子と一つ机に並びたかった。松坂屋の近くにある時計屋の女の子（理知的美人で男子全員の憧れ）朝日町のまあちゃん（暖か味のある美人、深窓のお嬢様で女友達が常に取り囲んでいた）うどん屋のあいちゃん。（下町美人でハッキリしていた）

軍国主義、道徳、滅私奉公。欲しがりません勝つまではを旗印に、防空頭巾を離さず、竹竿の先に縄を三十センチに切ったもの十本くくり付け、水に濡らして空襲の火事に備える。防火用水は各家庭に一つ備える。ガラス窓には×印に紙を張る。各家の縁の下に防空壕を掘る。学童疎開、家財疎開、学徒動員、幼児小学生を巻き込みながら、支離滅裂行政為政者、独裁者達が指揮を取る。小学生たちの有るべき育成はどこへやら、夢、希望は粉々に飛び散っていった。生まれた日から十五年間の戦争で、人生を振り回され、後遺症貧血を余儀なくされた。

昭和十九年三月十二日夜、米空軍機Ｂ２９名古屋市空襲。中学一年生十四才。八重国民小学校も僕の家も、親しい隣近所の家も、友達の家も茶碗一つ箸一膳

も残さず奇麗に焼けた。これを〝戦災〟の一言で片付けるのが戦争だ。しかし、これから貧乏苦難の始まりである。国、政府は〝耐乏生活〟と言ってすましている。

空襲警報が鳴り響き、空にサーチライトの条が何本か照り出し、照明弾が落とされ真昼のように明るくなる。母が防空頭巾を弟妹に着用させて、博覧会跡（今の愛知芸術センター）へ避難した。家の見納めとも知らず出て行った。十四才の少年と父が煙草、郵便切手、雑貨販売の我が家の縁の下の真暗な防空壕へ避難する。十分か十五分経ったであろうか、南へ四、五軒先の二階屋根に焼夷弾のケースがカランカランと瓦にぶつかりながら道路に落ちると同時に発火。

火の手はあちらこちらに花火のように散り、アッというまに道路のアスファルトの繋ぎ目の条までハッキリ見えた。明るくなった。この時、仏教で言う処の、この世が有るとすれば少年と父のみが、この世に存在していると一瞬思った。両側の家並みの屋根が火を吹き出して火災のトンネルになった。道路の黒いアスファルトが金色に輝く、家並みも金色だ、父は防火用水の水を少年の防空頭巾の上から全身にかけ、金色に輝く火の海を少年の手を引っ張り、這いずりながら八重国民小学校へ無我夢中で辿り着いた。距離にして百メートル位だが焼け落ちる落下物に巻き込まれず、死神に取り付かれず、死神に立ち向かい勝った。寂しい構えのなかに安心感を与えてくれたコンクリートの建物の小学校が迎えてくれた。

小学校には中野先生、永井先生、小使さんの三人がいた。もう手の打ちようがないから逃げるぞと、三人は浮き足立っていた。校門を入って左側の靴置場の窓ガラスが明るくなり、炎でピシピシ音を立て割れる、割れると同時に火の手が盛んになる。校庭は昼間より明るく藤棚も鉄棒も砂場も、最後の「鮮明さ」を少年に見せた。校庭の防火水槽に水があっても何ら役に立たず無力である。

先生方はもういない。校舎の窓ガラスがピシピシ割れる音を後にして、八重国民小学校の最後を見た少年と父が火の海の町へ、母、弟妹の姿を求めに出た。家も財産も失くした。哀れ。（戦争反対と火の用心が強烈に十四才の心に、異常なほど焼きつけられた）

博覧会跡に行っても母、弟妹の姿はない。夜が明けた、疲労困憊の顔顔。情報集めに必死である。どこどこは焼けた、どこどこは焼けずに残った。不正確な情報が乱れ飛び交う。全て何処までも自分の足で歩く行動のみが我々の権利として残されただけである。東区の父の弟の家に母達は避難していた。十二才、九才、六才、三才、一才の弟妹と共に。両親は空襲を甘く見ていたようだ。また家に戻れる位の避難態度だから貴重品一つ持たず、着のみ着のままである。

戦争が終わってからの話であるが、一才の美代子が二才から七才ぐらいまでは、飛行機の爆音を聞くと何処にいても、震えて母の側に逃げてきていた。戦争とは乳児の心にも深い傷を残す残虐な行為であると憎んでいる。

政府や軍部の命令を忠実に守った国民は、焼け野が原にただずみ、目的を失い呆然としていた。これから歩く貧困飢餓の世界を知るよしもない。気付いた時点が出発点である。貧困飢餓の世界に足を踏み入れ、二年か三年か、五年がかりで抜け出せるのか、その人々の背負う荷物の重さにより道程が待ち構えている。我が家は七年かかった。子ども一人に一年かかった計算。「焼け出され」「無産階級」をしっかり味わった。一年で立ち直った人もあれば、四十年経っても立ち直れない痛手を持っている人々もある。

〝認識しよう、戦争の悲劇を〟

当時の新聞社は三社、ラジオはＮＨＫ一社、テレビはない。情報を得る国民は、新聞、ラジオが軍部の言いなりに戦局報道していたことに気付かず。事なかれ主義体質からの報道とも知らず読んでいたし聞いていた。瞎の大人社会であった。僕が生まれた頃から教育は軍国色を強めつつ、学問の自由を奪い、青少年の自立心を歪め、国のために喜んで死ぬ教育を十五年間続けさせていた。

我が家が戦災で焼け落ちた夜。父の経営する東別院近くにあった工場も燃えていた。文字通り無一物、無一文で焼け野が原に放り出されてしまい、親戚、友人、知人宅を点々とする流転の日々が始まったが、国は何もしてくれなかった。そして両親は私達を必死で育ててくれた。
長男　英治の私。長女　喜代子。次女　貴美子。次男　昌良。三女　千代子。四女　美代子。五女　富代子の兄弟姉妹は全員今も元気でいる。父母に感謝。

終戦哀史

川口　篤孝

昭和二十年八月十五日終戦となって部隊は八月末に駐屯地を出発し、漢口近くの揚子江岸の中国人農家の納屋や奥の部屋を無断借用して、干草や藁を敷いて寝室として復員の来る日を待つ事になりました。

中国軍は我々にたまに街の清掃、或いは道路補修程度の使役を命じただけなので、何等する仕事もなく毎日ぶらぶらと遊んでいました。
二日か三日に一回八キロ程離れた街まで、食料を十数人で天幕や毛布を持って受取りに行くのが大きな仕事でした。受取る食料はほんの少しで、或る時に

は水のような粥をすすった事もありました。
大の男が仕事はないと言えど、お湯のような粥が少々では耐えられません。それで農家出身者は、中国人農家のお手伝いに行って何か食べさせてもらっていました。

或る農家に年頃の娘さんがいました。毎日お手伝いに行けば、片言の中国語と片言の日本語である程度の会話が出来る。更に同じ黄色人種で容姿容貌は全く同じですので、仲間の一人として通じあうようになり、農家も日本兵のお手伝いを入れてから収穫も増えました。お手伝いは九月から翌年の四月まで続きました。

昭和二十一年四月になって復員出発の日が決まりました。農家の娘さんとお母さんは、お手伝いに来ていた兵隊に日本に帰らず、結婚して残ってくれと一心に懇願していました。

そこで兵隊は困って考えた末に中隊長に相談しました。中隊長は兵隊の家庭のことや兄弟姉妹のことなどを色々聞いて、ご両親や兄弟姉妹は健在と思うから一度家に帰り、元気な顔を見せて話し合って決めなさいと言われて、日本に帰ることにしました。

出発の日に娘さんとお母さんは泣きながら、兵隊さんの横に並んで揚子江の乗船場まで付いてきました。

戦争の残像

高橋　幸雄

「エィッヤァー」軍人の指導で上級生が銃剣の教練を受ける声が東新国民学校（現東桜小学校）の校庭に響いていた。私は名古屋市中区の東新町交差点に近い場所で誕生し前述の国民学校へ昭和十八年に入学。学校は、当時としてはハイカラな角が丸みを持った三階建ての洋館で、校庭の二宮尊徳像の隣の奉安殿への礼拝、朝礼での国旗掲揚、週一回の屋上からの宮城遥拝が義務付けられていた。

家の前の通りでは戦勝祝賀の提灯行列があったり、防火訓練が行なわれていた。しかし、戦局は急を告げ、おぼろげながらも、学徒動員、サイパン玉砕、神風特攻隊などのことを聞かされる中、父も軍需工場への徴用があり家業を捨てて参加した。

二年生の時、父に赤紙が来た。ついに妻子持ちの年配者にも召集令状が来るようになり、千人針と、日の丸に武運長久と大書し周りに親戚、知人が寄せ書きした国旗を持って出征、海軍へ入隊し軍艦に乗った。名古屋駅での別れの時、

さすがにこれが父との最後の別れと予感し涙が止まらなかったことが思い出される。

父が終戦後に無事復員した時、この国旗を持ち帰り、その後も大切に保管し、自慢の品でもあった。後年、鬼籍への旅立ちの折り、柩の父をこの国旗でつつんで送り出してやった。

食料や衣料品も生活必需品が配給制度になり、昼食は東新町角の食堂に一時間も前から並んで雑炊を食べた。戦局が思わしくない状況の中で、やがて学校からの集団疎開が現実のものとなってきた。私は幸い岐阜の本巣郡に父の在所があり、母と弟と妹を残して一人で疎開した。慣れない田舎であったが、毎日の農作業手伝い、風呂の水入れ、風呂炊きなどなどこまごましたことを言いつけられて頑張り、世話になっている者の役目と考え、少しもつらいとも寂しいとも思わずに出来た。

冬は雪が深く、しもやけに悩まされ、田んぼには蛭（ひる）がいて食いつかれ足は血だらけになった。履物はズック靴もめったになく、わら草履を履いた。しかし、集団疎開した人達は、お寺などで集団生活し、食料不足で栄養失調で病気になり、実に悲惨であったことを後々聞かされて、その人達に申し訳なく思った。一度、名古屋へ帰った時に、田舎の農作業で鍛えた成果を生かして家の庭に母達のために防空壕を掘った。母が褒めてくれたし、我が家の柔らかい布団がうれしかった。

米軍の空襲が続き、母達も危険になったため、田舎へ疎開してきた。電気も井戸もない小屋に住むことになり、ローソクと隣からのもらい水、風呂は三日おき位に在所で入れてもらった。我々だけでなく疎開者は一様に冷たくあしらわれたと思う。食料も仲々手に入らず母と買い出しに精を出した。自分達で畑を借りて野菜を作り、始めて収穫した胡瓜（きゅうり）を今でも思い出す。食べ物といえば、米不足で味のない「さつまいも」「南瓜（かぼちゃ）」「川せり」「糠（ぬか）で作っただんご」「蝗（いなご）」田んぼにいた「田螺（たにし）」も食べた。

学校の昼食は今のように給食はなく、一人一人弁当を持っていった。食料難で米がないので弁当が持っていけず、食べに帰った。息を切らして帰って梨（なし）を一個かじって昼食にした。そのためか今でも梨は好きになれない。学校の運動場も耕して畑になった。

終戦前に一才の妹、戦後に半年の弟が短い命を落としたが今から思えば栄養不足が原因かも知れない。いよいよ戦局は厳しくなって田舎にも空襲警報があり、真暗な中で梨畑へ避難したが、夜の岐阜や大垣の空襲は天空を焦がす赤い

炎に身がすくんだ。
やがて終戦を迎えた。父は数ヶ月後に復員した。戦後まもなく名古屋の我が家を訪れた、一面焼け野が原で我が家の焼け跡には焦げたミシンの頭や瀬戸物がちらばっていた。父が復員して井戸を掘り、電気を引いて一息ついたが、食料不足はひどくいつも空腹だった。
後年、一家で努力して生活を立て直し名古屋へ戻った。戦争で命を落とした人、傷ついた人など不幸な話を沢山聞いた。戦争の惨禍と一言で言うが並大抵のことではない。私はまだ恵まれていたと思う。

戦争記念館に展示された特攻隊員の遺書を見学する時、その逞しい精神、やさしさ、国を思う心、達筆さに涙と尊敬の念を抱く。
航空機メーカーに勤務して、「零戦」の復元作業の機会を得た。戦後長年月を経た現在における「零戦」は、「乗っていた人間の真剣な生き方の象徴」「青年の尊い命を奪った反戦のシンボル」といった様々な見方があるが、多数の太平洋戦争戦没者の鎮魂碑として、また世界の最優秀機として日本の技術が世界水準に到達していた。それを凌駕したことの偉大な業績と敬虔の心を残すために心血を注いだ。

齢六十六歳、静かに過去を振り返り「もの思い」に耽る時、戦中戦後の激動の時代が頭をよぎる。願わくば、子や孫らが決して戦争のない、平和な時代を過ごすことを念じて止まない。

私の軍隊生活

坂　鉦位知

戦の虚しさ、戦争の悲劇を思うと、無念の思い。戦死、戦病死した戦友、ご遺族の心情を推察する時、無情の思い、涙ぐむ私です。
私は教育召集で、昭和十六年十月二十日、豊橋部隊に入隊。この部隊の大半は、静岡部隊と協力、サイパン戦に出撃した留守部隊です。現役兵は少数、予備兵が多く、和やかな雰囲気の下、暖かい指導教育に恵まれて喜ぶ。

一ヵ月後、全員衛生兵として、豊橋陸軍病院に転属、内務班は六班、古年兵と初年兵は同数で十五名宛。古年兵を戦友と呼称、当番兵となる。班長、他の下士官の当番は交代で勤務。内務班は峻烈、演習中に整理箱が散乱、点呼後の内務教育は、お地蔵様・自転車競争・蝉取りと愚かな姿勢に、初年兵を並べて対抗ビンタ。喫煙は不可、隠れて吸う初年兵、消灯後に便所で煙が出ている、吸殻が落ちていると、直立不動で殴られ、更に、初年兵全員の責任と、対抗ビ

ンタを繰り返す。古年兵は怒声を発する、初年兵は嘆き恐れる。

十二月八日、太平洋戦争に突入、教育下士官の興奮した演説、夜毎にビンタが響く。嬉しかったこと。現役古年兵の一人、消灯後、床にもぐると、食べろとアンパンを呉れた。美味しさ、嬉しさに瞼を濡らす私です。一月二十日、召集解除、肩叩き合い狂う喜び。

三カ月後の、昭和十七年四月下旬、赤紙召集、一期の思い出に南紀白浜に一泊。伊勢神宮に武運長久祈願。会社で送別会。入隊数日後、島田隊長以下出動、桜通り沿道に、小学生が小旗を振る姿。呉軍港を夜出発、見送る人も無く感無量。釜山に上陸、京城で日本人住宅に一泊。家族の方の暖かい接待、広い部屋で食事、入浴、娘さんから贈られるお守札、嬉しかったです。

赴任地は鮮満ソ国境「金蒼」淋しい部落。他に輜重兵中隊が駐屯している。楽しい思いでは、将兵一体となり、木造兵舎に居住し、対ソ戦を意識して、匍匐（ほふく）演習、担架教練に。水道も電気も無く、ランプ生活、暗くなると兵の顔も不明、慰問団も慰問袋も無く、唯一の慰安は、三カ月毎に、部隊全員演芸を楽しむことと、外出は、山中に咲く野性の芍薬（しゃくやく）の大群落に囲まれ、故郷を思い故郷を語る、楽しみの場です。

十一月に部隊解散、半数の将兵は帰還、残余の将兵は、南方各方面・北満・中支・南支と、分散。永別も知らず、各地に転属した。

私は古年兵二名と同年兵十三名、北満チチハルに転属。途中、新京・ハルピンに下車。繁華街の雑踏、高級将校が多く、日本人女性の華美な化粧と服装に、唯々呆れ返り驚愕した。

赴任地チチハル。軍の官舎に、将校が妻を呼び寄せ、兵を当番兵として私用する姿……。これが戦時中の軍の将校か、嫌悪を感じる。

野戦病院勤務五カ月、防疫給水部十カ月、この両部隊で強制貯金をさせられ、復員後請求に、日本の郵政省は、債務は満州国、日本では払出不能と、不可解な理由は、納得できないと、抗議の手紙も無視されて、残念です。

十二月下旬外出禁止、一月私物整理、若干の同年兵は東満、牡丹江に転属。三月部隊編成替の兵に夏服支給、夜半に非常呼集、専用ホームで貨車に乗車、行先不明、山の中腹に用便、辺鄙な場所で、婦人会からの食事給与、窓も明けられず、景色も見ることなく旅順に集結。二週間滞在、旅順から大連へ、更に日本の横浜へ、軍需品を積載、小笠原半島到着。交互に上陸演習。休養か？。出動命令、輸送船は揺れ、甲板上に転がる兵、二人病死。水葬。

四月三十日夜パラオ港に、海軍基地は米軍機の爆撃で木端微塵に残骸を晒す。ペリリュ・アンガウル両島へ分遣派遣も知らず、路上に仮眠して防空壕掘り、終へて更に奥地へ強行軍。山の中腹に兵舎建築作業、伐採・建築・仮眠も交替、急げ急げに昼夜分たず強行作業。疲労で倒れる戦友、満足な看護も与えられず、此の世の生地獄か？思うも無理か。漸く完成した兵舎、湧き揚がる喊声に、蓋をする如く、七月、サイパン島玉砕の悲報を知らされる。

惨憺たる連日の空襲、九月、全島民に軍属を任命。されど過重な供出の割当に、住民は苦しみ、もがく悲劇。芋泥棒の横行、更に、サイパン陥落後は、アメリカ軍より昼夜の空襲、食料倉庫の爆撃は、連日の如く、兵の疲労感は、日毎に増し、栄養失調に苦しみ乍らも路上に、掘り残しの芋を拾う憐れな姿を、誰が笑う。生きる為の懸命の努力を、知るか知らずか。軍上層部の無気力を感じつつ、兵として成すべき仕事も、不可能と思う。

これが戦争だろうか、アメリカ軍と直接に対戦せず、空からの爆撃、現地住民の怒り、不満に直接対処せず、圧力に私は嘆く。実戦に参戦せず、幸運を喜ぶも、食なくして流浪の哀れさ。戦争の罪悪をしみじみと思う、終戦を知った兵の無常の喜び、兵の歓声、アメリカ軍から食料の支給に感謝。更に、アメリカ軍の船で、日本の浦賀に上陸する。平和が甦る。表情の明るさ。日本は救われた。感動する兵と共に、熱い涙が流れた私。

チャコちゃん

石河　孝益

三重県員弁郡大安町の山間に、大安中学校がある。昭和二十年代の頃の校名は、成章中学校と言った。昭和二十六年四月、中学生になった私は、その成章中学校の生徒になった。当時の私の古里、三里村と他に。梅戸井村、大長村の、三カ村で成り立った、新制中学校である。

自宅からは遠い、この中学校へ、大長村出身のチャコこと寿子さんが通っていた。たまたま中二の時同じクラスになったのが縁で、特別の仲良しになった。読書好きで、絵を描くことが上手、そしてお互い父の無い母子家庭の子だった。唯一の違いは、彼女は三人姉妹の長女であり、私は八人兄妹の末っ子であることだった。チャコの父は、フィリピンへ戦争に出掛けたまま終戦になっても帰国しなかった。私の長兄はビルマ（現ミャンマー）で戦死した。

中学校では、丁度チャコのお父さんくらいの年齢の、担任の教師を仲間にし

て、交換日記を書くことにした。初恋の心情（片想いだが）などを文字にして楽しんだ。ペンネームを私は「水沢千鳥」チャコは「水沢千草」と名乗った。楽しい時期だった。チャコの家は、村の中を流れる幅二メートル程の小川の上流にあり、離れが建っていた。私がチャコの家を訪れた時、愛想の良いお母さんが、庭の無花果（いちじく）の実を、笊（ざる）に山盛りにして、出してくれたのを思い出す。

その頃、員弁郡遺族会の会長だった私の母が、音信のないチャコの父の身の上を案じ、県の担当者に調査を依頼した。調査は遅々として進まず、ようやく二年後に聞かされた返事は、余りにも悲惨だった。

チャコの父は、敗戦後現地の女の人と結婚し、フィリピンに妻子がいて家庭を持っている。その上本人は日本へ帰国する意志も無いと伝えてきたのである。チャコの家族は、八十歳の祖母、母、弟に妹の五人で暮していた。祖母は、「く」の字に腰が曲がり、遺族年金の恩恵も無く、嫁や孫を愛している様子もなかった。

ある夏休みの午後、明け放した奥の部屋から、祖母は嫁に罵声を浴びせていた。慈愛に満ちた嫁（チャコの母）は、水仕事でぬれた手を拭き拭き、かけ寄って介護していた。チャコは中学卒業後、高校進学をあきらめ地元の農協に勤務した。

時が過ぎ高二の春祭りの日、久し振りにチャコに会った。セーラー服の自分よりも、手作りのワンピースを着て、甘い香りを思わせるような地声と、幼さの漂よう容姿がとても素敵で、私は「華のＯＬ」に早くなりたい……と思った。振り返って考えると、表面ばかり視ていた自分がとても恥ずかしい。

チャコは少々遅い結婚をして、長女を授かり幸せにしていたが、義父の死後、実母と同じように姑との苦労が待っていた。

紆余曲折を経た生活の後、五十歳からパーキンソン病を患らい、療養する中、体重が三十六キロにまで痩せて小さくなったチャコが、一生懸命に生きようとする姿に、かえってこちらが励まされた。

しかし三年前の六月、辛い人生を生き抜いたチャコとの別れは、容赦なく訪れた。八十五歳の実母を残して逝ったチャコ。戦争の悲劇の直撃を受けた、この母と娘には、何も報われる事が無い人生だった。悲しい。

今、イスラエルとパレスチナとの戦禍を聞く度に、平和と云う、ぬるま湯にとっぷりと浸ってしまった私たち日本人。この平和ボケの日本の将来を思うと、考えさせられる事ばかりである。

戦争体験

能村とし子

人生で一番夢多い十七才、それは大東亜戦争たけなわの昭和二十年でした。世の中は戦争一色でした。日本中、食料始め、あらゆる物資が不足していた頃です。私は女学生三年生。学徒動員で軍用機のエンジンを作っていました。手作りのモンペ作業着で、ペンを持つ学生がハンマーを持って、頭には白い布に「神風」と書いた鉢巻をして、昼夜二交替で毎日頑張っていました。

当時、食事は白いご飯などなくて、盛り切りの茶碗に大根、イモなどの入った「まぜご飯」でした。でもそれらは今思っても、限りなく、おいしいものでした。色々入っているので、栄養的にもかなっていたのではないでしょうか。勿論、肥満児などいないし、誰も病気などとは無縁でした。物資不足といえば、すべての物が極端にない時代でした。女性として一番困ったのは、生理用品が手に入らなかったことです。それは配給制でした。

十軒ぐらいで隣組制度があって、配給品を分配していました。「ちり紙」など枚数を数えて隣組で分け合いました。一枚でも貴重でした。石鹸も配給制でシャンプーなどありません。知識のある人は、廃油と苛性ソーダーで石鹸を作るなど工夫をして頑張っていました。

私達は、山に自生している、じょうばの木の葉を摘み取って、それを大きな鍋で煮出すと泡が出ます、それで身体や髪を洗っていました。

それから、今思っても一番残念だったのは、今まで日常普通に使っていた英語が、敵国の言葉ということで使用禁止になってしまったのです。例えば「ダンス」を「舞踊」といいなおして、野球の「ストライク」「アウト」も「よし」「だめ」になり私達は大変混乱しました。本当に信じられないような時代でした。そうこうしている内に、戦局は益々逼迫してきました。でも大本営の発表はいつも、日本優勢でしたが、南の島では玉砕のニュースが相次ぎました。

私の富山県にもＢ２９が飛来してくるようになりました。そして夜間などの爆撃で、焼夷弾が雨あられのように投下され、まるで映画のワン・シーンを見ているようでした。

そして愈々、終戦も近くなりました。そしていろんなデマが、まことしやかに飛び交いました。その一つはソ連軍が日本海の沿岸に上陸し、攻めてくると言うものでした。それで女、子どもは山に隠れるようにと言うことでした。みんな本当に真剣に心配しました。そうしている内に、終戦を迎えました。みんな茫然自失状態だったと思います。

私達は、学校に戻りました。でも、二年間の空白は埋めようがなく、卒業しました。今、思っても、貴重な体験というよりは、人生にとって、取り返しのつかない、損失にも思えましたが、みんなそれぞれが、それぞれに、大きな犠牲を強いられた、時代だったと思います。

これらのことを、今、反省して、次の世代に二度とこのようなことが、おきないことを、祈るばかりです。私も、今後は、余りの人生を、悔いなく、有意義に生きていきたいものと、念願しております。

私の戦中・戦後

山田美智子

昭和二十年になって、名古屋にも頻繁にＢ２９が襲来するようになった。私は小学二年生。登校途中で警戒警報が発令されると、家へ引き返し、解除されると登校した。また、集団疎開や縁故疎開で児童が減って、もう落ち着いて勉強する状態ではなかった。戦地の兵隊さんへ送る慰問袋に入れる図画や作文をよく書いたことを思い出す。

空襲が激しくなると、いつでも逃げ出せるように、夜も洋服を着たまま寝た。寝てもすぐサイレンで起こされた。爆音が迫り、爆弾投下による地鳴りが始まると、恐怖の余り、私の歯は必ずカチカチと鳴り、警報が解除になるまで、止まらなかった。

三月十二日の夜は、Ｂ２９の大編隊が名古屋方面に向かっているという情報がラジオから流れ、間もなく、かってない大爆音が頭上に轟き、ザザーッという音とともに、外が真昼以上に明るくなった。声を飲んだその時、私の目の前に、屋根を突き破って、火の玉が降って来て床に広がった。私は驚いて倒れた。父に起こされ外に出ると、多くの火の塊が地を這い、どの家の軒や柱も、メラメラと燃えていた。消火する父を残し、母と避難場所へ、火のない所を選んで走った。

そこは堀川沿いの石炭置場で、松重閘門の前だった。辺りは炎の群れ、強風が起こり、パチパチゴーゴーと、恐ろしい光景だった。父は消火は不可能だといって、私達のところへ来た。風向きが変わってそこが危険になり、筏で対岸へ渡ることになった。材木用の丸太の筏にしがみついていた。堀川を筏で渡ったのだ。火の粉除けをしてもらい、私は眠った。目を覚ますと、夜が明けていた。

焼け野原になった町を歩いて、やっと我が家跡に着いたが、家は燃え落ちて、

無惨な姿に、涙が出た。鉄釜が一つ溶けずにあった。父がその辺りを掘ると、蒸し焼きになった人参が出てきた。土の下に貯蔵してあったものだ、私達はそれをお食事にして、かじって食べた。

北東方面に焼け崩れなかったビルが一つだけ見えた。父は「松坂屋だ、中区は燃えてしまった」と言った。学校へ集まる伝令があった。父は「燃え落ちた学校の跡に、担任の先生が待っていて、無事を喜んでくれた。パンをもらって帰った。立派な日置国民学校が空襲で消え、この日が先生や級友との永遠の別れとなった。悲しかった。

私達は、焼けずにいてと願いつつ、昭和区役所近くの、叔母の家へ歩いて行くことにした。ランドセルを背負っている子を見て、みじめな気持ちだったが、叔母の家があってほっとした。空襲が毎日のようになったので、勤務がある父を残し、私達四人は、安全な田舎の伯母の家（今の豊田市）へ移った。三月十八日、軍需工場に多くの爆弾が投下され、多くの死傷者が出たという。十二日は焼夷弾だったので、私達は助かったのだ。母は父を心配して、妹二人を連れて名古屋へ戻った。伯母の家族はとても可愛がってくれたけど、やはり淋しかった。

四月から、母の実家（今の東郷町）近くに四人で疎開した。農家の納屋を改造した家で狭かったが、家族いっしょが嬉しかった。私は三年生になり、母が帯芯で作ってくれた白いカバンを下げて、村の分教場へ通った。いなご捕り・田螺捕り・蛍追い・藁草履作りなどが、特によい思い出である。

父は、熱田の空襲で多くの同僚を亡くしたが、奇跡的に助かり、悲惨な状況を話してくれた。父もいっしょに住むようになったが、終戦を境に、田舎に居づらくなり、名古屋の叔母の家に戻った。そして、父の職捜しが始まり、辛うじて職を得た。

戦争は終わったけれど、食料難がますます深刻化した。配給でもらう物はほんのわずか、母は、あちこちの農家に買い出しに行っても、売ってくれないと嘆いていた。母の実家や伯母の援助はあったが、母の苦労はたいへんだった。

当時食べた物で、印象深い物を挙げてみよう。お米がないから、主食のご飯は食べられない、つまり主食の代用として、さつまいも・麦・豆・とうもろこし・たまに米が手に入ると、米粒が数えられるほどのシャビシャビのお粥に、大根などを入れた雑炊、正体不明の粉のだんご汁や蒸しパンなどなど。おかずとして、さつまいもや南瓜（かぼちゃ）の葉や茎の煮物、ヨモギやセリのお浸しなどなど。毒でなければ、野草でも何でも食べたような気がする。

親は、食料の獲得に必死だった。私達も、まずくても文句を言わず、食べた。

今でも鮮明に思い出されるのは、主食の代わりにキューバ糖の配給があり、それでカルメラ焼きを作って食べたこと。重曹の味の強い、あの甘さが懐かしい。

その後、年々食料事情が良くなり、ご飯が食べられるになっていった。教科書も印刷された「わら半紙」を折って、切って、綴って作ったものから、薄いながらも、本らしい物になっていった。

紙

竹中恵美子

昭和二十一年、私が小学四年生の頃の事です。学校の授業の中で習字の時間がありましたが、その頃は練習用の紙など無く、また清書する為の白い紙も、なかなか買ってもらえない時代でした。

先ず最初に字を練習するための用紙は、新聞紙でした。そしてその新聞紙が墨で真っ黒になり、書くところが無くなるまで、一生懸命に字の練習をしたものです。まあこの字なら、なんとか形が良く書けるようになったと思うと、初めて新しい白い清書用紙に書きました。このように物が不足するようになったのは、日本の国が長い間戦争して、大切な物資を使い果たしてしまったからです。

これからの日本の子ども達に、このような惨めな思いをさせたく無いので、戦争は二度としてはならないと思います。最近では資源節約で、再生紙を利用するようになりましたが、昭和の終り頃から平成の初め頃までは、戦争時代の物資不足など、どこ吹く風と、上質な紙なども、ぜいたくに沢山使われて、使用後は再生紙にもされず、粗末に捨てられていました。

その頃、昔戦争を体験された方で、ある企業の重役を退職されたお宅に伺ったところ、新聞の折り込み広告の裏に印刷のしてない紙をまとめて、四ッ切りにして、メモ用紙を作っておられました。人間苦労をした時代を、忘れ勝ちになりますが、この方のように、尊い体験を忘れず、物を大切にされているのを見ると、私達も物資を大切にしたいと思います。

そして二度と戦争と言う馬鹿な事をしないように、若い人たちに伝えて行きたいと考えております。戦争とは、物資の大消耗戦であり、人と人とが殺し合いをすることです。限りある物資を粗末に扱い、殺人を繰り返すのは、何とおろかな事でしょう。一日も早くこの世の中から戦争を無くし、平和な世界が来るように願うのみです。

戦災の思い出

山内　正雄

昭和二十年五月十四日は、名古屋のシンボルである名古屋城が戦火で焼け落ちた日。私の家も焼失した。十三才中学二年の春である。この日朝七時三十分頃、敵機来襲のラジオのニュースと同時に空襲警報のサイレンが、けたたましく鳴り響いているのに、東の方から火の手が上がり、黒煙と熱風がすごい速さで押し寄せてきた。

どこへ落ちたかなと空を見上げると、名古屋城が火炎に包まれ見えない、やられたかなと思っている間もなく、煙の切れ間から焼夷弾が雨のように落ちるのがはっきり見え、これは危ないぞと防空壕へ入った。するとあっちこっちから火の手が上った。防空壕に直撃弾が当たったら三人とも死んでしまう。母は、お前は、米・みそ・缶詰・布団を載せた乳母車を引いて逃げろ、兄と残って火を消すからと指図した。防空壕は家の近くのやや広い広場に、共用で使うように作ってあり、近所の人も一緒に入っていた。

誰が言うともなく、ここでは死んでしまう逃げろと、逃げ出しましたが、私は目の前が見えないほどの、荷物が積んである乳母車を押しているので、うろうろしていると、近所の人が「おーい、こっちがいいぞ」「あっちがいいぞ」との叫び声が聞こえますが、熱風と煙の中では判りません。かなり遅れたので、少しでも広い道路に出ようとしたところ、そこは強制的に家屋を壊したところでした。その頃、空襲が激しくなったので、駅・工場の周囲や、家屋の密集している処は被害を少なくするため、住んでいる家を「家屋疎開」といって強制的に壊し広場にしました。

火が迫り焼け死んでしまう「よし」と心に決め懸命に乳母車を押していると、消防団の人が前の方で「こちらに、逃げろ」と指図しているのですが、前が見えないので、声だけ聞こえどちらか判りません。「こちら」と思う方へ乳母車を押して逃げました。後で聞いた話では、消防団の人と一緒に逃げた人は全部焼け死に、姿形はどこにもなかったとのことでした。私は、前が見えないので、反対に逃げたのが幸いしたのでした。

前年三月まで通学していた小学校の南側にでました。二階建ての校舎はメラメラ燃え、火の粉は飛んでくるは、熱風と風圧で前に進めない。それに目・鼻・喉は痛く、水槽の水で濡らした手拭いを当て、体を低くして乳母車を押し、広い電車道にたどり着いた、この火の海の中で誰もいない。焼死したのではないか「もうこれまでか」いや、どうしても逃げ延びなければ、逃げられる処ま

で逃げようと乳母車を押すことにした。

電車道は四車線の幅で歩道はなく、中央に複線の線路その両側は車が一台と人が通る道で、両側の家は今燃えている最中、焼け落ちてしまった家、電柱が燃えて電車の架線が垂れ下がっている。どうしてここから逃げるか、道路左右は燃え盛っている。中央は架線が熱く敷石はデコボコである。乳母車の布団は加熱発火する寸前の状態の中を中央を進むことにした。架線が乳母車の輪にからむ、布団に付いた火の粉を払い除けたりして、約一キロメートルを抜け、やっと火のない場所にたどり着いた。

何時間火の海をさまよっていたか。無我夢中であった。

火に追われ逃げる人は同じ方向へ走る。よし。その先に避難所があると思い付いて行くと愛知女子商業高等学校の校庭に着いた。よくぞ生きておれたと安堵の胸をなぜおろした。校庭はごったかえり、お互いの無事を確かめ合う人。肉親を捜す人。家が焼けて呆然と座り込んでいる人。水がなくて飲めないし、食べるものもない。避難した人たちと一緒に校庭の土の上で一夜を過ごす。私は乳母車の荷物が心配と、母と兄はどうしたろうかと頭の中を駆け巡った。

翌日の昼頃、焼け跡に入れると聞いたので、必死に守った乳母車を押し、空腹と喉の渇きを我慢して行くことにした。途中、木に人の死骸がぶら下がっていた。爆弾で飛ばされた人だと思った。地面には焼けたままの死骸があったりして、母と兄は無事であってほしいと念じながら、家のあった辺りまで来ると、火はくすぶり、きな臭い匂いがしてきた。もしや母と兄ではと思いながら、防空壕に近かずくと、疲れきった母と兄の顔が見えた。

お互い無事であったことを心から感じ取った。私が命がけで守った乳母車から、米・味噌などを出し母が作った食事の美味しかったことは今でも忘れられない。

戦争はまだまだ続く、今日は命があっても、明日は判らないと言いながら、母の作ってくれた食事で元気が出て、焼けただれ残ったトタンで屋根を、燃えて細くなった柱で小屋を建て、焼け跡に住むことにした。

追記。

一　名古屋城は金鯱を、おろすため足場が組まれていたので、第一の目標になり。二、三分で全焼したと、後日仕事をしていた近所の人から聞いた。

二　当日は、お城から順次西に波状空爆であったので、逃げ場をなくした人々はお堀に飛び込んだが、お堀の水も熱く多数の人々が溺死した。

白虹日を貫く

渡辺　正彦

戦争中、旧制中学で「漢文」を学んだ。その中に表題の「白虹日を貫く」の絶句が特に印象として残っている。文意は確かでないが、国民のことを考えず、威張り散らしていると、太陽の真中を白い虹が貫通する印しを見せるぞ、それはお前の国が亡びる前兆である。心せよ。であったと記憶している。

この「白虹日を貫く」について、私は終生忘れ難い、強烈な体験をすることになる。

時は太平洋戦争末期、昭和二十年五月十四日、午前十時頃であった。その日、アメリカの「超空の要塞ボーイングB29戦略爆撃機」四百四十機の大編隊による、名古屋空襲があり、三千三百トンもの焼夷弾の雨が降りそそぎ、名古屋城をはじめ市内の殆どが、ことごとく焼失した。

その頃私は、学徒動員により、熱田区にある「日本車輌」で蒸気機関車の製造に従事していた。昭和十九年十二月十三日に始まった本格的な空襲以後、度重なる空襲のため、作業中に空襲警報のサイレンが鳴ると同時に、それぞれ自分で安全と思う方向を決めて、逃げることになっていた。

五月十四日、作業して間もなく空襲警報のサイレンが鳴り、私は瑞穂区雁道近くまで走り、手近なところにあった防空壕へ入った。空襲が激しくなり、黒煙が立ち込め太陽を遮り、辺りが薄暗くなってきた。ふと見上げると、南の空高く黒煙の中に太陽がぼんやり浮かんでいる。その時、突然、白い虹が半円形にかかり、太陽の中心を貫いているのが見えた。

その瞬間、脳裏をよぎったのは、漢文の授業で習った「白虹日を貫く」の故事だった。そして「ああ日本の国も、いよいよ滅亡の時が来た」という思いであった。その頃、国内で「日本滅亡」など口にしょうものなら、たちまち国賊扱いで殺されかねないので、この事は胸の奥深くしまい込んだ。

それから三カ月後、真夏の雲一つない晴れた日に、日本は降伏した。

♥世界の子どもたちに愛を♥
願いよ届け～抱きしめたい～

土井貴紅子 作詞・赤尾　茂 作曲
歌唱指導 土井貴紅子
ピアノ 高橋 知里
手話 セント・ポーリアの会

この美しい地球には
無邪気に遊ぶ子ども達が　似合うと思いませんか
でも荒れ果てた大地で　戦いに脅えて
泣く力さえなくした　子ども達がいるのです
せめて温もりを忘れた幼子を
この胸に抱きしめたいのです

この美しい地球には
希望に輝く子ども達が　似合うと思いませんか
でも涙にあふれた　つぶらな瞳を
もうこれ以上　哀しませたくないのです
その痩せた頬の涙を　この手でぬぐい　そして
この胸に抱きしめたいのです

（間　奏）

一人の母として　この腕の中に
しっかりと抱きしめたいのです
しっかりとだきしめたいのです

♥世界の子どもたちに愛を♥願いよ届け～抱きしめたい～の詩は土井貴紅子さんが、東南アジアの戦争の傷跡が残っている現場へ出向き、おびえ・やせた子を抱いた『実体感温度詩』です。土井さんは「セント・ポーリアの会（花言葉＝小さな幸せ）」の皆さんと共に、１９９７年からチャリティコンサートをして、『日本ユニセフ協会』『世界の子ども達にワクチンを』『国境なき医師団』へ合わせて４３０万円ご寄付されています。
今日は、土井さんが、平和につつまれた素晴らしい地球を、子ども達に引き渡していきたいと、希望をもって、力強く歌います。是非聴いて覚えて下さい。

２００円で
子どもの命が救えます
２００円で６種混合ワクチン
はしか・ジフテリア・破傷風
百日咳・ポリオ・結核。
の予防接種を貧しい国の子ども達にプレゼントできます。

編集後記

★本記録集発刊にあたり十四名の諸兄姉より貴重な体験談を提出していただきました。
ご協力に対し厚くお礼申し上げます。

★昭和十六年から二十六年まで、終戦を挟んで十年余の心に刻みこまれた、いずれかの時点に照準を合せ記憶を甦らせ、苦難の思い出を極限まで凝縮させ精根込めた記述内容から新たな事実を教えてもらいました。

★また、五十七年経過した現在の心境を切々と綴っておられます。異口同音に戦争の愚かさ、平和の素晴らしさを強調されています。
二十世紀が戦争の世紀と言われ、二十一世紀こそ平和の世紀としてスタートするはずが大きく遅れているのも現状が証明しています。

★来年は「戦争体験を語り継ぐ集い」も十五回目を迎え、「戦争体験記録集」が第十集となります。これからもより多くの貴重な体験談を記録し、発刊していくことで平和の維持に貢献したいと思います。

編集者一同

戦時体験記録集（第九集）

編集・印刷・発行 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 平成十四年七月十三日

発行部数 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 百五十部